

H A N A Z O N O

Global

Vol. **1**

花園から、世界へ！『花園プレス・グローバル』

現代社会で求められる「グローバル人材」＝長期の海外留学を経験し、語学力はもちろん、豊かな知識と人間性を身につけ、世界で活躍する日本人。

そんな人たちも、かつては「ふつうの中高生」でした。今ほど海外が身近ではなかった時代、「十年後、自分が英語を使って仕事をしている」なんて、想像もしなかった——。そんな「かつての中高生たち」と、花園のGTN・中村広記先生との対談が実現。

どんな学生時代を過ごしたのか？ どうして海外に行こうと思ったのか？ 海外で学んだことは何なのか？ 「グローバル人材」になるためのエッセンスを聞き出します。第一回目は、株式会社リアルクリエイティブ・プロジェクトマネージャーの松山信司さんです。

松山 信司さん（写真・左）

株式会社リアルクリエイティブ、プロジェクトマネージャー。ニューヨーク州の2年制大学・モーホーク・バレー・コミュニティカレッジを卒業後、中国への留学を経て、ニューヨーク州立大学フレドニア校を学部首席で卒業。「想いを現実に」をモットーに、日本のメーカーの海外交渉をサポートする。



株式会社リアルクリエイティブ

松山 信司

×

グローバル教育推進室統括

中村 広記

「自分を出せなかった」中学・高校時代



中村：まずは、留学しようと思われたきっかけから伺いたいと思います。海外への憧れは、昔からあったのですか？

松山：なんとなく、ですね。現実的になったのは、高校生のとき、国内の大学をいろいろと調べるうちに NIC International College という海外留学をサポートする教育機関を知って、説明会に参加してからです。僕は昔から絵を描くことが好きで、それまでもずっとアートをやりたいと思っていました。でも、それだけでは物足りないようにも感じていて。英語ができれば、そこから広がっていくのではないかな、と考えたんです。

中村：当時から、積極的な性格だったのですね。

松山：いえ、ずっと小さい頃はそうだったのですが…。うちは母子家庭で、引っ越しやいじめを経験したこともあって、中高ではうまく自分を出すことができませんでした。それでモヤモヤしていた分、「もっと自分を出したい」という気持ちが強まってきていたのだと思います。ただ、いざ留学となると、経済的な負担も心配で、なかなか決心がつかずなかつたんですけど。

中村：決心したきっかけはあるのですか？

松山：ちょうどその頃に、ある年上の友人に電話したんです。そうしたら、その彼は留守で、彼のお母さんが出たんです。特に将来のことを相談しようと思っていたわけではなかつたのですが、おばちゃんの方から、ふと、「しんちゃん、今年、受験ちゃうの？」って。それで、留学を考えていることを話したら、「やりたいと思ってるなら、やってみたら？」って言われたんです。『やってみたら』…おばちゃんはなにげなく言ったんでしょが、その一言が、当時の僕には衝撃的だったんです。ほんの一瞬ですけど、目の前が真っ白になって。それで、電話を切って、「これをしよう」「これがしたいことや」と。

中村：その一言で、ふっきれたんですね。松山さんの出身高校は、進学校ですよ。周りの反応はどうでしたか？

松山：担任の先生には反対されましたね。「(海外に)行っても話せるようにならない」と。でも、その先生は留学をしたことがないのではないかと、想像で言っているだけなのではないかと感じたので、あまり気になりませんでした。母は、最初、「あ、そう」という感じでした(笑)。僕の準備が進むうちに、だんだんと実感が湧いてきたようです。反対、というわけではなくて、「やりたいことはさせてあげたい」と思ってくれていたようなのですが、経済的なこともあるし、その頃には兄も家を出ていたので、複雑な気持ちがあったようです。

中村：お母様のことで、決心が揺らいだりすることもあったのですか？

松山：それはなかったですね。決心してからは迷いませんでした。経済的なことは課題でしたが、英語を勉強しながらアルバイトをして貯金して。でも、あまり覚えていないんですよ。勉強も、したのかなあ？ いや、絶対にしたはずなんですけどね（笑）。大変だったという記憶がないんです。楽しくて仕方なかったです。一緒に留学を目指していた友人たちも、ちょっと変わっているけど暖かくて面白い人たちばかりでしたね。

「英語力」は大切。でも、それ以上に…

中村：その後、いよいよ留学ですね！ アメリカでは、まず、どちらの大学に行かれたのですか？

松山：最初は、モーホーク・バレー・コミュニティ・カレッジというニューヨークの2年制大学に行きました。アートの分野で定評があって、学費が安い大学ということで。そこでも費用を抑えるために、寮長のアルバイトをしていました。寮長をすると、寮費と寮での食費がただになるんです。仕事の内容は、夜中に騒いでいる学生に注意しに行ったり、各国の留学生にキャンパス案内をしたり。最初のころはあまり英語ができなかったので、アメリカ人ばかりのミーティングで周りのみんなが笑っているのに一人だけ分かっていなかったりと、いろんなことがありましたけど、そういうことも全部、楽しかったですね。

中村：アルバイトもしながら、最終的にはニューヨーク州立大学フレドニア校を学部首席で卒業されていますよね。大変な努力だと思いますが…

松山：大変なこともあったんですけど…、やはり「辛かった」という思い出はあまりないんですよ。「大変」と思うようなことでも、つつこんでやっていくと、むしろ楽しくなっていくんです。特にアメリカでは、やればやるほど評価してもらえるので、張り合いもあります。専門がアートだったので、夢中になって遊んでいたようなものですかね（笑）。

中村：特に印象に残っていることはありますか？

松山：やはり、寮に住んだこと、寮長をしたことはとてもよかったですね。寮はおすすめです。いろいろな人と深く関われるし、そこで学んだことは、その後、中国に留学したときにも、日本で働いている今でも役立っています。具体的には、「踏み出す力（度胸）」と、「やり抜く力」。それに、「コミュニケーション力」…。それは英語力ではなくて、つたない表現でも、自分の意思をどんどん言うことです。喧嘩になりそうでも、黙っていないで何か言う。そういう姿勢がとても大切だと学びました。



花園の皆さんも「やってみたら？」

中村：現在は、どのようなお仕事をされているのですか？

松山：メーカーをつくる会社で、プロジェクトマネージャーをしています。最近だと、自撮り棒や、静電気を利用した付箋など、海外から商品を仕入れるために交渉をしたり、ウェブデザインもしているので、大学で学んだことがそのまま活かしています。動画の勉強もしていたので、今後は、そちらもやっていきたいですね。

中村：夢が広がりますね！最後に、花園の中高生へのメッセージをお願いします。

松山：「やってみたら？」ですね、やりたいことがあるんだったら。やる前は、誰だって不安になるものです。でも、実際にやってみたら、大抵はなんとかなるんですよ。失敗したっていいし。たくさん失敗して、その度に考えて、またやってみる。何度も、何度も。そうしたら、毎日がどんどん楽しくなっていきます。僕は、留学をやってみて、とてもよかったです。

中村：「やってみたら？」、とてもいい言葉ですね。高校時代、「留学をしたことがない」先生に反対された松山さんが、実際に留学をして、今の中高生には「やってみたら？」と言われる。その変化が印象的でした。留学経験者が増えている今、そのような言葉を子供にかけてやることのできる親もきっと増えていくでしょうね。



HANAZONO
Global Press

『花園プレスグローバル』創刊号はいかがでしたか？ グローバル教育推進室は、これからも「地に足の着いた」グローバル教育の推進を目指し、本紙を通してさまざまな情報を皆さんのお手元にお届けします。乞うご期待下さい！（May K）